生活・文化5

庭園発掘
―さまざまな園池―

http://www.kyoto-arc.or.jp
(財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

儀式の場所や庭園内に池を設けることは、飛鳥の地に宮が点々と営まれた頃より始められる。奈良時代になると徐々に、わが国の風土や習慣に合うように形態や景観に変化がはじまる。

平安時代の庭園においても、池の占める意味は極めて大きかった。池は、観賞や涼を得るためばかりでなく儀式の時などにも重要な演出効果をあげていた。こうしたことは、当時の様子を描いた絵巻物などからうかがい知ることができる。では、市内各地の発掘調査で発見した園池について眺めてみよう。

神泉苑跡

平安時代の神泉苑は東西2町・南北4町の計8町を占め、特に桓武から嵯峨朝にかけて天皇の遊興の場として盛んに利用された。

庭園の位置図

1 神泉苑跡　2 高陽院跡
3 堀河院跡　4 右京三条二坊八町跡
5 鳥羽離宮跡　6 法勝寺跡

鳥羽離宮金剛心院の池跡

緩やかな曲線をえがく汀には点々と景石が並べられている。奥に見えるのが導水溝。

1990年から92年にかけて実施した神泉苑の発掘調査で検出した池は、縄文時代や弥生時代などの古い時代の流路の上に設けられていた。これらの流路内には樹木が腐ることなく残っており、地下水が絶えることなく流れていたことがわかる。

高陽院跡

桓武天皇の第8皇子の賀陽親王が邸宅を構えたことが高陽院の始

まりである。その後、この地に藤原頼通が、寛仁三年（1019）から2年8ヵ月の月日を費やして邸宅を造営する。その様子は当時の日記や絵巻物で知ることができる。

今までの調査では、5箇所で池跡を発見している。1箇所は平安時代前期から中期（賀陽親王、東西1町・南北2町）のもので、他の4箇所は平安時代中期から鎌倉時代（藤原頼通、2町四方）であった。池の規模は新しくなるにつれて徐々に縮小している。

1981年と1989年の調査で検出した池底の高さは、海抜40.5m、洲浜の高さ40.7mであったが、その東側で、1988年に調査した園池東岸部は、池底が海抜41.0m、洲浜は海抜41.3mであった。こうした調査成果から、藤原頼通以降の高陽院の池は二つに別れていた可能性が考えられる。

堀河院跡

この地には多くの貴族の邸宅や院が造られるが、最も華やかであったのは堀河天皇（1079～1107）の時代であった。

1983年から84年にかけて実施した調査によって、平安時代後期の池や遺水などを発見した。池全体の規模や形態については明らかでないが、この調査で検出したのは、池の北東部の一部である。池底近くの高さは37.5m、景石が据え付けられていた付近は38.0mから38.5mであった。先の高陽院との遺構の高低差を見ると、堀河院の方が約2.5mほど低くなる。

平安京右京三条二坊八町跡

1986年に実施した調査では、平安時代前期から中期にかけての池を検出した。池の北岸は、小振りの石を並べて護岸していた。この石組は、南側では見られなかった。池は浅く、30から50cm前後であった。池のベースは粘質土であり水は湧き水でない。

鳥羽離宮跡

鳥羽離宮跡内の池は、大きく三つに分かれ、園池としては日本でも最大級の規模であった。池は、海抜12から13mの低湿地にあり自然の池を巧みに利用したり、あるいは人工的に新たに設けている場合もあった。水位は、季節に影響されやすかったものと考えられる。

法勝寺跡

承保二年（1075）に白河天皇が造営を開始した寺院。金堂の前面には浄土式の庭園が造られていた。また造営前には藤原氏の別業（別荘）となっていた場所でもある。池は、寺が営まれる以前から存在していたことが文献から知ることができる。

1972年の調査では、法勝寺の園池東岸の一部を確認した。そして汀には、夥しい量の瓦片や玉石が見られたが明確な洲浜にはならなかった。また、1982年の調査では、園池北東岸の一部を確認している。

さて、平安京内の池は、二・三の例を除き基本的には人工的に掘りくぼめられたもので、深さも浅いものが多い。一方、京域外の鳥羽離宮や、嵯峨院（大覚寺）などの池は、造営以前からあった自然の池を巧みに利用したり手を加えたりして園池としていた。

京域内の池の水は、導水溝による場合や池底からの湧き水などを利用していた。あるいは史料にあるように、泉などの湧き水を池に引く場合もあったのであろう。自然の池や泉を利用した池の水は、季節の変化に左右されやすかったものと思われる。当時の貴族は、四季のこうした変化を楽しんでいたのであろう。　（鈴木久男）

右京三条二坊八町の池跡
池の一部には、石を組んだ部分もあった。石の大きさは30～70cm。

高陽院の池の洲浜
右側が池の岸部。洲浜の石は10～15cm。